
ツイーンズソング

美衣菜

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

ツイーンズソング

【Nコード】

N1736B

【作者名】

美衣菜

【あらすじ】

叶えることのできなかった母の夢。双子の大樹と桜は、二人で一つの夢を追い掛ける。この世に誕生させてくれた母の為。自分の人生を犠牲にしてまでも育ててくれた母の為。そして、自分自身を輝かせる為に。

夢

目が痒くなるほどの生暖かい風が、教室中に吹き回った。

飛ばされそうになったプリントを、大樹はバシッと押さえ付けた。

（進路希望って…そんなの決まってるんだろ）

大樹は書き殴って机に顔を伏せた。

「アーティスト」

「はい、じゃあ後ろからプリント回してください」

プリントが回収し始めているのに、大樹は居眠りを続けた。

「田中君、プリント前に回してよ」

後ろの席の女子が困惑していた。

それに気付いた前の席の男子が、大樹の頭をペシッと叩いた。

それでも起きない大樹。

「ははは。こいつバカ？第一志望校アーティストだってよ」

「そんな大学ねえよ」

「やっぱり田中アホだよなあ」

教室中に呆れた笑い声が充満した。

「アーティスト!？」

そうですが、何か？という顔で桜は担任を見た。

「大学は？行かないの？」

「はい」

桜は何の迷いもなく答えた。

「何言ってるのよ田中さん。あなた学年トップの成績なのよ。行くと思うえばどこでも狙えるのよ!」

「もうずっと前から決まってることですから。高校まではちゃんと

卒業すばいいって親にも言われてますし。」

はあ、と担任は大きなため息をついた。

「あのねえ、はっきり言っちゃうけど、田中さんには似合わないわよ。こんなフリフリ着てルンルンルンなんて歌うアイドルなんて。」

桜はポカーンと呆れた表情で、担任の変なダンスを眺めた。

「先生、あたしアイドルになりたいなんて言ってますよ。あたしがなりたいのは…」

シンガーソングライター

です。」

『笑われたって からかわれたって 気にならない程 本気なんだ』

現実

1年後1

ジャカジャカジャカジャン

大樹は体を前後左右に動かしながらギターを引いた。

「僕の気持ちを聴いてください」

自己陶醉気味の路上ミュージシャンを見て、街行く人々はクスクス笑いながら通り過ぎて行った。

「サンキュー」

誰一人として立ち止まる事なく通り過ぎて行く駅前。

（ちっ、この世はつまらない人間ばかりだ）

大樹は完全に人のせいになっていた。

「ふあああ」

桜は大きなあくびをした。

（徹夜で曲作ってたから、さすがに眠い。）

「あのお、お尋ねしますが」

レジカウンター越しにヌツと出てきた顔に、桜は驚いた。

「田中ちゃんおはよう！これはこれは驚かせてしまったかなあ？失

敬」

（出たな！アカブチ！）

毎日のように桜のバイト先のCDショップに現われる赤ブチメガネをかけた男だ。

「まあ、毎日言ってるから分かってると思うけど、もうすぐアイリシンのデビューシングルが発売になるよね。そこでだ、まあこれも耳にタコができるほど聞いていると思うが、僕はあそこの入り口にある、等身大 夢村アイリ
のパネルがどうしても欲しいのだ！僕の命を田中ちゃんにくれてやっても構わないくらいだ！だからどうしてもどうし……………」

（はあ、うざい）

「田中さん、上がっていいよ。おつかれさん。」

運良く交替の時間がきて、桜は難を逃れた。

「おつかれさまでした！」

「ちよっ、田中ちゃん！まだ話は終わってな……………」

桜はバイトが終わると、人通りの多い公園で歌うのが日課だ。

路上ミュージシャンにとって条件のいい場所なので、いつも必ず他のミュージシャンも数人いた。

（急がないといい場所取られちゃう！）

「♪僕の歌くこの想いく誰にも届かないく」

駅前を足早に歩く桜の耳に、聞き覚えのある声が入ってきた。

（大樹だ！相変わらず変な歌だなあ）

大樹を横目に桜は先を急いだ。

公園に着くと、既に数人のミュージシャン達が、自分が一番だ、と言わんばかりに、一生懸命歌っていた。

桜は彼らから少し離れた場所に腰掛けて、ギターのチューニングを始めた。

その時、遠くで拍手喝采が聞こえた。

「アンコール！」

「もう超感動！！」

十数人の人々に囲まれて、鼻高々になっているミュージシャンを、桜は羨ましい思いで見つめた。

『今は芽もない土の中 でもいつか 満開サクラのように』

日常

「あははははは」

大樹はリビングのソファでテレビを見ながら大爆笑した。

「あはははっ、この芸人本当におもしろいわね。」

大樹の横でジェニーも笑った。

ジェニーの左手にはビックサイズのポテトチップの袋。

ボリボリとおいしそうに食べては笑い、ときどき大樹も袋に手を伸ばしながらは笑い。

見た目は全く違うが、似たもの同士の二人だ。

「ただいま」

桜が帰宅した。

「おかえり、桜。」

ジェニーは真ん丸顔を桜に向けた。

「今日も誰も聞いてくれないヘタクソな歌一生懸命歌ってきたか？」
大樹が意地悪な顔を桜に向けた。

「あのねえ、あたしはあんたと違うの！もう大変よ。人がわんさか集まっちゃって。」

「またまたあ、見栄張っちゃって。」

「み、見栄なんかじゃないわよ！ってかあんたこそシケた顔して歌ってたじゃない。今日駅前で見たわよ。人が立ち止まるどころか、クスクス笑われちゃって。片割れとして情けないわあ。」

「なっ！」

ジェニーは二人の喧嘩を呆れた顔で眺めていた。

「そんなことより大樹、あたしのニット勝手に着ないでよ！男のく

せに女物着るなんて気持ち悪い。」

「はっ？ ニットなんて着てないよ！ 帽子は拝借させてもらったけど…」

ん？ という感じで二人は顔を見合わせた。

二人の後ろでジェニーは気まずい顔をして立っていた。

二人はギロっとジェニーを見た。

「あまりにもかわいいニットだったから、ついね。

いいじゃない！ 一回借りただけなんだから、許して！ サ・ク・ラちゃん。」

「許せな〜い！ 一回だろうが何だろうが、伸びちゃうじゃない！ ブカブカになっちゃうじゃない！ ご飯食べた後にお菓子やアイスガツガツ食べて、もういい加減太るのやめて！」

「まあ、ヒドイ。確かに私はおデブちゃんだけど、かろうじて桜のかわいいタイツだって履けたわよ！ デンセンしちゃったけど…」

「あ、あのカラータイツ…ないと思ったら…あれも…」

お母さんのバカあああ！！」

『あたりまえ過ぎて 僕には気付けなかったもの』

傷

「我が社は、ここ数年の間に、沢山の大ヒットアーティストを生み出してきた。先日デビューした夢村アイリのデビューシングルは、既に10万枚を越える売り上げだ。今後の活躍にも期待したい。だがしかし、

我が社が生み出してきた今までのアーティストはアイドル色が非常に強い。それではファン層が広がらないという難点がある。そこでだ、

これからは実力派と呼ばれるアーティストを生み出していこうと思っ
っているのだ。」

高層ビルの建ち並ぶ大都市の一角にあるレコード会社、ドリームミュージック。会議室は緊迫した空気がピリピリと流れていた。会議終了後、社長の桑田は、エリート社員の相澤に声をかけた。

「相澤君、君のスカウトは百発百中の腕前だ。期待してるよ。」
桑田社長は相澤の肩をポンと叩いて立ち去った。

「おまかせください。」
相澤の顔は自身に満ちていた。

「奥野 おおー！！何で何で何でお前がここにいるだ？あ、ああ？」
雑居ビルが建ち並ぶ下町の一角にあるレコード会社、斎藤レコード。狭いオフィスに斎藤社長の濁声がビリビリ響いた。

オチブレ社員奥野は、雑用に追われクタクタになった顔を斎藤社長に向けた。

「何でって言われましても、やることいっぱいあるんだから仕方ないじゃないですか。あたしがやらなきゃ誰も雑用なんてしないじゃないですか。文句があるならもっと人雇って下さいよ！」

社長はコメカミに血管を浮き上がらせた。

「奥野おお〜！！新人の癖に偉そうな口叩くなああ！！いいから早く行け〜！！実力派ミュージシャン見つけるまで戻ってくるなあ！！」

奥野はオフィスをつまみ出された。

「ったく、探せばいいんでしょ。見つけてやるわよ。アツと驚くミュージシャンを。見てろよ、ハゲ社長。」

大樹はいつもの駅前にしゃがみ込んだ。

（今日こそ立ち止まらせてみせる！）

♪ジャンジャンジャカジャン

勢いよくギターを弾き始めた。

とっておきのバラードを歌いだそうとした瞬間、目の前に体格のいい男が立ちはだかった。

（立ち止まった！）

大樹は舞い上がる気持ちを押さえて冷静に歌った。

男は体をプルプルと震わせながら大樹をジッと見ている。

（そんなに感動してもらえるなんて！）

大樹は涙をグッと堪えながら歌い続けた。

サビにさしかかろうとした瞬間、男は大樹に向かって何かを投げた。

ネギだ。

「きさま、毎日毎日うるさいんだよ！気持ち悪い歌歌いやがって。営業妨害なんだよ！もう二度とここで歌うな！」

男は駅前でうどん屋を営む店主だった。

大樹はネギまみれのままポカーンと口を開けて動けずにいた。周りでは人々がクスクス笑っていたり、同情な目で見ていたり。それを感じて大樹はやっと正氣に戻り、逃げるようにその場を立ち去った。

桜はいつもの公園で歌っていた。

「♪目に見える未来より 霞んで見えない明日を この胸いっぱい
の夢抱えて」

しっとり歌いあげる桜の声は、少し離れたところから聞こえる、下手くそなフォークソングにかき消されていた。

それでもめげずに歌い続ける桜の視界の隅っこに、一人の女性に姿が映った。

（あたしの歌聞いてくれてる？）

桜の声が心なしか弾んだ。

歌い終わると、女性は拍手をしながら桜に近づいてきた。

「久しぶりだね、桜ちゃん」

桜はハッとして下を向いた。

「卒業以来だね。本当に音楽活動してるんだあ。すごいね。」

女は桜と同じ高校に通っていた生徒だった。

成績は桜に次いでいつも二番。

桜に強く対抗意識を持っていた。

「桜ちゃんが大学行かないって聞いたときは本当にびっくりしたよ。

音楽なんて下らないことするって知ったときは正直呆れた。で、どうなの？今この状況後悔してない？ふふふっこの状況。」

女の嫌味たっぷりな言葉に桜は俯いた。

「あっ！来た。おいこっち！」

遠くから二人の女が小走りにやってきた。

「あれっ？田中さんだよな？」

「そうそう。噂どおりミュージシャンしてるんだって。」

「マジ？すごい度胸！」

「てかさあ、写メ取らせて？大学の友達に見せたい！」

「あははははっ」

桜はグッと拳を握り締めその場を逃げるように去った。

「おい、どこ行くの？一曲聴かせてよ！」

「逃げちゃったよ。高校のときのあの自信たっぷりはどうしちゃったんだろうぬ。」

「あはははは」

背後から聞こえる声に、顔も上げられず桜は走った。

（悔しい…）

その時、ドンっと人にぶつかった。

「ごめんなさい！」

桜は詫びて足早に立ち去った。

「あっこちらこそ、ごめ…」

奥野の謝りを聞くこともなく女は立ち去った。

（いた〜）

奥野はぶつかった腕を擦った。

同時になぜか心も痛んだ。

奥野は女たちのやり取りを一部始終見ていたのだ。

「かわいいそうな子。」

『顔も上げられない程の痛み　耐えて耐えて　強くなるため』

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n1736b/>

ツイنزソング

2010年11月8日08時16分発行